官版
翻刻

語彙別記

ホ 2
223

完

疏正月是夏十一年三月也今年二月是夏之十二月

計為七十三年年猶未終也假作全年算之量七十三年以全日三百六十五日乘之得二万六千六百四十五日每年有四分日之一是四年而成一日以四除七十三年得十八日并全日為二万六千六百六十三日今除三日整取六旬則此年未當十二月廿七日也而杜長曆云廿三日者以閏差故也諸

史趙師曠而咨焉

朝多君子其庸可

諸侯且明歷也夏四月己

是以知鄭難之不

蔡景侯為大子般

有子禍也○初王

五反于偽反

將見王而歎括除王入

士過諸廷期行廷○閒

此夫欲有此朝入

廷之權

大視躁而足高

文部省刊行

官版

語彙別記

大阪　龍文書肆藏版

東京帝國大學圖書
明治22
門 223
號
卷 ×

言語のそなはらぬ十四種ありさまでわわかるゝ十種にて
ことわる故ふまづ十種活用をあゞて示す活語指掌ふこの事いとこゝろかたり第
一上の第八まをを作用言といふ第九第十を形狀言といふ

第一 四段活用

將然言 さか(む) 咲　連用言 さき 咲　終止言連体言 さく 咲　已然言 さけ 咲　え 動く自字ふ〜たらん活用ぬ印ちり已下皆この定ちり

如此かきくけと四段ふ活用く故ふ四段活用といふちり

第二 一段活用

か　將然言連用言 き(し) 着　終止言連体言 きる 着　已然言 きれ 着　く け と

かくきとつかとの一言ふ〜くそれふるれの添りて きる きれと

明治廿三年九月五日購求

活用くゆゑに一段活用といふなり

第三 中二段活用

か 将然言連用言 おき 起　終止言 おく 起　連体言 おくる 起　已然言 おくれ 起　け　こ

かくきくとゝふ二言みてそれふるれの添りて おくる おくれ と活用くゆゑに中二段活用といふなり

第四 下二段活用

か 将然言連用言 うけ 受　終止言 うく 受　連体言 うくる 受　已然言 うくれ 受　け　こ

かくけくとゝふ二言みてそれふるれの添りて うくる うくれ と活用くゆゑに下二段活用といふなり 下二段活用はけくと顛倒してたゝらくなり

第五 加行變格活用

か 将然言 こむ 來　連用言 き 來　終止言 くる 來　連体言 くる 來　已然言 くれ 來　け

かくこきくとゝふ三言みてそれふるれの添りて くる くれ と活用くゆゑに加行變格とゝふ此活用は來とゝふ言のゝこの活用なり變格と云ふは こきくと三段ふ活用が他ふ異なるゝふ受る辭も異なるが故なり 受る辭の異なるは國を見給へ

第六 佐行變格活用

さ 将然言 せ 爲　連用言 し 爲　終止言 す 爲　連体言 する 爲　已然言 すれ 爲　そ

かくせしすとゝふ三言みてそれふるれの添りて する すれ と活用くゆゑに佐行變格とゝふこの活用は爲と御坐との二言のゝの活用なり變格と云ふは せしすと三段ふ活用が

他ふ異なるふうへふ受る辭も亦異なるゆゑ故なり（図を見合せて考べし）

第七 奈行變格活用

（未然言）いな往も（連用言）いな往（終止言）いぬ往（連体言）いぬる往（已然言）いぬれ（使令言）いぬ往（希求言）いぬね往

かくなふぬぬとふ四言みてそれふるれの添りて（ぬる）（ぬれ）と活用くゆゑふ奈行變格とふ此活用ハ往と死との活用なり變格とふハなにぬぬと四段ふ活用ゆゑ異なるゆゑふ（已然言）ぬれ（ね）希求使令言とわのみ又受る辭も異なるゆゑ故なり（図を見てこれを三つの變格とふ）

第八 良行四段一格活用

（未然言）あらむ有（連用言）あり有（終止言）ある有（已然言）あれ有（ら）

かくらりるれと四言ふ活用くゆゑに良行四段一格とふ一格とふゆゑふ有居侍坐との四言ふ限まる活用なるがうへふあり、をり、などいへば常の四段活用の格ふくん連用言なるを連用と終止とを兼たりされば「京ふあり」つく席ふをりさだまるなど用言より用言へつづけば連用言となり又京ふあり田舍ふをり」などいへば終止言ともなるゆゑ常の四段とかはり受る辭も亦異なり故ふ一格とふ受る辭の異なるゆゑ図を見合せてくゝ考べくゝ考べくゝさるなども此の活用なるまでゝ其ハ然有、然有のあを省きてふ詞ふく實ハ有とふ詞の活用なるまゝ皆こゝふ属せり

第九 く〜き活用

連用言 浅み　連用言将然言 浅く　終止言 浅し　連体辞言 浅き　連体言 浅き　已然言 浅けれ

かく活用をく〜き活用とゝふこの活用のなかゝて（く）（し）（き）の三つをとりいで〜名とせるなり

第十 ゝく〜き活用

連用言 ゝくゝ　連用言将然言 ゝくゝ　終止言 ゝくゝ　連体辞言 ゝくゝき　連体言 ゝくゝき　已然言 ゝくゝけれ

かく活用をゝく〜き活用とゝふこの活用のなかゝて（く）（し）（き）の三つをとりいで〜名とせるなり、この十種のうち作用言ハ五階、形状言ハ六階ゝたゝくゝだまりなるゝとゝ〜も〜図のつぎゝよりゝ〜

作用言

第四段

	一階	二階	三階	四階	五階
将然言	一				
連用言	咲	き	く	け	れ
終止言	押	し	す	せ	
連體言	立	ち	つ	て	
已然言	逢	ひ	ふ	へ	
	住	み	む	め	
	降	り	る	れ	

	一階
将然言	か
連用言	む
終止言	む
連體言	む
已然言	む

第二段一

著	似	干	見	射	居
き	ふ	ひ	み	ゐ	ゐ
ぎ	む	ヒー	ミー	ヰー	ヰむ
て	つ	けり	めり	ゐむ	ゐし
く	ら	で	ま	ゐ	ゐか
きる	ふる	ひる	みる	ゐる	ゐと
かぎ	らむ	めり	まで	ゐなり	ゐを
きれ	ふれ	ひれ	みれ	ゐれ	ゐれ
ど	む	ぎ	ど	む	ども

第三段二中

起	落	戀	恨	老	下
き	ち	ひ	み	ん	り
ぎ	む	ヒー	ミー	なむ	む
て	つ	けり	なり	なむ	し
く	つ	ふ	む	ゆ	る
ぐ	めり	まで	なり	と	か
らむ	ぐ	に	なり	を	
きる	つる	ふる	むる	ゆる	るる
かぎ	めり	まで	なり	と	か
らむ	ぐ	に	なり	を	
きれ	つれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ
む	ど	ぎ	む	ど	ども

第四段二下

得	受	痩	捨	寢	添	譽	消	枯	植
え	け	せ	て	ね	へ	め	ゑ	れ	ゑ
ぎ	ぎ	む	む	ヒー	ヒー	なむ	なむ	ぎ	ぎ
て	て	つ	つ	けり	けり	なむ	なむ	し	し
く	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
ぐ	ぐ	べ	めり	まで	なり	と	か		
らむ	かぎ	ずる	つる	ぬる	ふる	むる	ゆる	るる	うる
に						なり		を	
れ	れ	すれ	つれ	ぬれ	ふれ	むれ	ゆれ	るれ	うれ
む	ど	ず		ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
ども									

第五	第六
加行變格	佐行變格
來	爲
こ	せ
ざ	ざ
む	む
ま	ま
む	む
き	し
て	て
つ	つ
け	け
む	む
し	。
く	す
ら	ら
べ	べ
め	め
ま	ま
り	り
と	と
か	か
る	する
か	か
に	に
り	り
を	を
れ	すれ
ず	ず
ど	ど
も	も

第七	第八
奈行變格	良行四段一格
往	有
死	居
な	ら
ざ	ざ
む	む
ま	ま
む	む
ぬ	り
て	て
つ	つ
け	け
む	む
し	し
ぬ	る
ら	ら
べ	べ
め	め
ま	ま
り	り
と	と
か	か
ぬる	る
か	ん
に	変
り	に
を	り
祢	れ
ず	ず
ど	ど
も	も

形狀言

	一階	二階	三階	四階	五階	六階
連用言	み	く	し	さ	き	れ
連用言		て	そ	ふ	ふ	ど
將然言		む	と	なり	なり	で
終止言				を	を	ども
連体辭言						
連体言						
已然言						

第九

き	し	く				
深	淺					

第十

き	し	く				
悲	戀					

み						
く	て	む				
し	そ	と				
さ	り	ふ	な			
き	り	ふ	な			
れ	ど	で	ば			

作用言ハ五階形狀言ハ六階なるさだまりなるべし圖面ふ第一階第二階とそりそのの詳なることハ次ふ示さがごとく

○第一階ハ四段活用ゆてハさ(か)ニ、おき(押)ニ、たち(立)ニ、あと(達)ニ、まち(住)ニ、ふ(降)

ら、等なり一段活用まてゝ（き）、（ゆ）、（い）、（み）、（ゆ）、（め）等なり中二段活用
（著似十見射居）
まてゝ（お）、（き）、（ら）、（ち）、（ち）、（い）、（ら）、（み）、（ゆ）、（り）等なり下二段活用
（起落戀恨老下）
まてゝ（え）、（う）、（け）、（や）、（せ）、（す）、（て）、（ね）、（そ）、（へ）、（ほ）、（め）、（き）、（え）、（か）、（れ）、（う）、（ゑ）等なり
（得受疲捨寝添響消枯植）
加行變格みてゝ（こ）佐行變格みてゝ（せ）奈行變格みてゝ（な）い
（來爲）
（ら）、良行四段一格まてゝあ（ら）、くゝき活用みてゝ浅（み）、ちゝく
（件）（有）
ちゝき活用まてゝ變（い）（ゆ）、等なり
（作用言の一階は將然言にてもかならずとする詞なり形狀言の一階は連用言にそ用言へつゞく詞なり）
○第二階は四段活用まてゝさ（き）、（ち）、（し）、（ち）、（ち）、（い）、（ち）、（み）、（ゆ）、（ら）等
（咲押立）
なり一段活用みてゝ（き）、（ち）、（し）、（み）、（ゆ）、（ら）等なり
（著似十見射居）
階二階もひとゝきとゝまる称なり一段は將然と連用とをあらはすなり
中二段下二段もかれらの定なり
（逢降住）
中二段活用みてゝお（き）、（ち）、（こ）、
（起落變）

う（ら）（み）、お（い）（ゆ）、（り）等なり、下二段活用みてゝ（え）、（う）、（け）、（や）、（せ）、（す）、（て）、
（恨老下）（得受疲捨）
（ね）、（そ）、（へ）、（ほ）、（め）、（き）、（え）、（か）、（れ）、（う）、（ゑ）等なり、加行變格みてゝ（こ）佐行
（寝添響消枯植）
變格みてゝ（し）奈行變格みてゝ（な）い良行四段一格みてゝあ（り）
（爲）（往）（有）
くゝき活用みてゝあさ（く）、ちゝくゝき活用まてゝこゝ（く）
（浅）（戀）
等なり
○第三階は四段活用まてゝさ（き）、（ち）、（し）、（ち）、（ち）、（い）、（ち）、（み）、（ゆ）、（ら）等
（咲押立）
なり一段活用みてゝ（き）、（ち）、（し）、（み）、（ゆ）、（ら）等なり
（著似十見射居）
と一段とゝ終止言と連體言とをひとゝきとゝまるこゝかあるふ
（逢降住）
まりて三階四階もひとゝきとゝまる図を見てもくゝ
中二段活用みてゝお（き）、（ち）、（こ）、
（起落變）
てゝう（ら）、（み）、（ゆ）、（り）、（ね）、（そ）、（へ）、（ほ）、（め）、（き）、（え）、（か）、（れ）、（う）、（ゑ）等なり
（恨老下）（得受疲捨寝添響消枯植）
下二段活用みてゝう（け）、（や）、（せ）、（す）、（て）、（ね）、（そ）、（へ）、（ほ）、（め）、（き）、（え）、（か）、（れ）、（う）、（ゑ）等
（得受疲捨寝添響消枯植）

加行變格みてゝ(く)、佐行變格みてゝ(す)、奈行變格みてゝ(ぬ)
良行四段一格みてゝあり(有)、ありとゆふ詞ハ連用と終止言とをひろ
図ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ふ　くゝき活用みてゝあさ(浅)し　ゝく(ゝ)ゝき活用みて
いゝひし(變)、等なり

○第四階ハ四段活用みてゝさく(咲)、おす(押)、たつ(立)、あふ(逢)、すむ(住)、ふる(降)、等
なり一段活用みてゝき(著)る(似)、ひる(干)、みる(見)、いる(射)、ゐる(居)、等なり、四段と一段と
ハ三階四階ゝひゝゝゝ

○第六階ハ作用言ふんなり〜く〜き活用まそん淺(けれ)、ちくちゝ〜き活用みそん戀(けれ)等なり

これを作用言の五階形狀言の六階とゝふ圖面を見合せて心うべし

つぎゝふ將然言連用言終止言連體言已然言、と五つゝふ轉ぎる意をもちゝ〜む

○將然言とゝふゆゑんハあらむとまる詞なれば、四段活用の咲(サク)とゝふ詞すて云ひでさかを將然言とゝふ其さかふ辭(ニハ)のむをそへて云へばさかむとなることれを俗言ふ譯(ウツ)せばサカウと云ふ意なり

○連用言とゝふゆゑんハさきふほふなどの類みて用言より用言へ續(ツヅ)く詞なるべなり　さきもみほふも用言なり

○終止言と云ふゆゑんハ語意こゝに至りてやめぶなり、「花(ハ)さく(サキマス)」「花もさく(サキマス)」「花さく(サキマス)」「花のさく(サキマス)」などハ語意やゝて用言へゝ體言へもつゞかぞ又終止言ハ[て][も][の](輕)[徒](ダ)(徒とゝふハて也の等の係辭(カヽリコヽバ)なくゝてたゞ終止(ヤミ)きゝゆゑんゝ(ヒ)とゝふ等の結詞(ムスビコトバ)なるべ上ゝ[ぞ][や][か](重)[何]等の係(カヽリ)辭(ニハ)あることなり〜[ぞ][や]等の結詞(ムスビコトバ)となりゝ連體言みゝく終止言ゝあらも次條ゝゆゑを見るべし〜

○連體言と云ふ故(ニヨ)ハさく花、花さく山とはゞきて用言へゝ續(ツヅ)くの係(カヽリ)なり　花も山も體言なり體言とゝ活用動ゝ詞をいふ　但〜上ゝ[ぞ][や][か](重)何

何とゝ[ハ]なく[ワ]ゝ[ヲ]なる[ル]ゝ[レ]の等の係辭あまびさくと云ふ詞類なり委しくは下卷にいふ

いその結詞とゝなりて其意を結びとゝむるゝとゝなるそゝ[花]

ぞさく[ヲ]花や[ハ]さく[ヲ]花か[ガ]さく[ヲ]花の[ノ]さく[ヲ]世の春をあけく花さく[ヲ]と結びとゝむる類なり、こゝぞ[ハ]やか[カ]の何等の係辭ふ應ぜれば[カリコヽバ]なり、係辭をむすぶゝ[カリコヽバ]ひてさくゝの詞もぜゝとゝなりてあぢはひてもあべし

○咲とゝふ詞ハ終止言と連體言との二つをかねる詞ふて其終止言のかゝハ[ム][ル]等の結詞[ムスビコヽバ]とゝなり連體言のゝたゝ[ぞ][や]等の結詞とゝなるありゝまゝゝの事のゝゝ

記解ハ下卷を見て知るべし

○已然言とゝふゆゑんハ然[シカ]なるゝことをいふ詞ゝそさけとゝいへべサイタガマアとゝふ意なれば、だとゝふ辭をそふまびさけだとゝなる、花さかざとゝいもざ花のさかざることゝして第一ひありぬた上ふ[ぞ]の係辭[カリコヽバ]あまびさけとゝふ詞ハ結詞[ムスビコヽバ]上ふ[ぞ]の係辭[カリコヽバ]とゝなるゝ花[ぞ]さけ[ガ]ゝ[ヲ]むまびどもゝゝゝゝ是なりくゝてたゝびさけとのゝゝつゝバサイタガヨイと云ふ意なり、是を使令言とゝふ使令とゝ下知詞なり又俗ふサイテタモレとゝふ意ゝもなる是を希求言とゝふなり以上を作用言の五階とゝふ使令希求のこと委しくハ下卷にいふべし

つぎふ形狀言の連用言、將然言、終止言、連體辭言、連體言、已然言と六つふ轉ぜる意をゝらしむ

○連用言とゝふハ浅(アサ)み戀(コヒ)しみ等なり、こゝ浅きこと戀しきことの形狀(アリサマ)をゝふ詞なり、こゝを連用言とゝふそのゆゑハ其意用言へつゞくが定例なるべたり、俗ゝ云ハ(アササニ)コヒシサニの意なり、但しこの詞體言へひつゞくたりともその意ハ用言へつゞけりとゝるべし

又このしみに混ぎつゝき詞あり、そハくらしみのみかなしみのみ

たゞなり、くるしまむくるしみ(み)くるしむ(む)ハくるしめかなしまむかなしみ(み)かなしむ(む)かなしめたゞのみハ四段活用なり、ざまべくこの活用なるゝしみかなしみとゝくこれを形狀言第一階の連用言とゝふ見るべし

○連用言ふ將然言を兼ぬとゝふハ浅く戀しく等ゝて俗ゝ浅々色ガ染マツタと云へば連用言ゝハあらざるやうなれど色ハ體言なり浅くとゝふ詞の意ハ色と云ふ體言へ付ぐかぎして染マツタと云ふ用言へ續けばなりまた浅く戀しくなどの辭をそゝまべ將然言ゝなるゆゑゝ第二階の連用言ハ將然言とゝふハ浅し戀し等なり、そのゆゑハ語意ゝふ

○終止言とゝふハ浅し戀し等なり、そのゆゑハ語意ゝふいたりてやめばなり「色ハあさし」「色もあさし」「色のあさし」と云ひて終止するなり、用言へも體言へもつゞかず丈も輕の徒等の係辭を受くその結となるなり

○連體辭言とゝふハ浅さ戀しさ等なり、そのゆゑハ體の辭かなゝふなり、をなどの辭を體の辭とゝふ體の辭のこゝとくゝ下巻ゝ

どうつる體言へつづくのぞまた上よ[か][の]等の係辭あまべむまそびこそぞとなりて其意を結ともむる詞となる「こころ[の]あささ」「人[の]つまなさ」「つゆ[が]うれしさ」「きく[が]かなしさ」などの類なり

○連體言とうつゝ淺き戀しき等なり、そのゆゑあさき心こひしき人の類みて用言へつづかざまこばなり、又上よ[ぞ][や][か][の][何]等の係辭あまべあさき、こひしきぞといふ詞いその結詞となりて其意を結びともむることゝなる、そはこゝろ[ぞ]あさき「こゝろ[や]あさき」こゝろ[の]あさき「人のこゝろ[いづで]あさき」と結びともむる類なり

○已然言とうつゝ淺けれ戀しけれ等なり、こゝ然なれるこゝをいふ詞にてアサイガマア、コヒシイガマアの意なるゆゑに已然言といふ、又上よ[こそ]の係辭あまべあさけれこひしけれといふ詞いその結び詞となりて其意を結びともむることゝなる、そはこゝろ[こそ]あさけれ「人[こそ]こひしけれ」などの類なり

つぎに作用言五階ごとに擧たる辭の用ひざまを示す

○第一階の辭はずむまじなむその五つなり四段活用

ふてさ㋐ずさ㋕むさ㋕まじさ㋕なむさ㋕ばとうひ

又一段活用すてんきず、きむ、きまし、きなむ、きだと其意
みまくのせくく用ふなるきなり　已下段ごとにこれらの定なり
なぞらへてしるべし
○二階の辭ハてつけりなむ　これらの五つをいふさきてさき
つさきけり、さきなむさきし、などなり
○三階の辭ハらむ、べし、めり、まじなりとかし、あどふて
さくらむ、さくべし、さくめり、さくまじ、さくなり、さくと、
さくかし、等なり
○四階の辭ハかなふなりをなどふく　此外なかりがよとまで
類多くあり、図面狹くして擧つ　なふまじすらなどの
かくまでハ水編ふいふべし
さくを等なると
さくを等なると

○五階の辭ハどどもの三種すてさけど、さけど、さけども、
等なりこの外も作用言をうける辭五階ことにあまて
もそれ下巻に示すべし　又ことふ四段活用なるさくとふ
ふ詞をとりいでうるそこの詞すて八種活用のかぎりハ
なりてこれこの例なることを示さむとてなり
つぎふ形狀言六階ことに擧たる辭の用ひざまを示す
べし
○形狀第一階の辭　こにうる辭なし、但しかなふなりをなどく
つけていひまもあて體言となるなりそこの
ゆる係辭へつぎなるもおなじ
定なりと心得べし
○形狀第二階ハあさくで、あさくて、あさくと、

あさく（く）とて、等なり

○形状第三階はあさ（し）と、あさ（し）とて、あさ（し）かく、などなり

○形状第四階はあさき（き）ふ、あさき（き）ふ、あさき（き）なり、あさき（き）を、

などなり

○形状第五階はあさき（き）かる、あさき（き）ふ、あさき（き）なり、あさき（き）を、

などなり

○形状第六階はあさけれ（けれ）ど、あさけれ（けれ）ど、あさけれ（けれ）ども、などなり

以上辭（テヨハ）のつゞけさまを示せるなりその意味等のこゝ

きこゝろは下巻にいへべし

活語自他辨

作用言、形状言の活用（ダラキ）をもらしむるふつきてまた二示もべ

きことあり、そは詞より自の詞あり、他の詞ありこゝろを詞の

自他（ジタ）とゝふ、この自他（ジタ）をもきゆへにもらぐゝ自他混淆して

もらぬ初のふこゝろを心のまゝふいひがゝしいひがゝけ

まべ筆とりて物もまるし、ようて今 ゐを示も

○九自他（ジタ）の詞を四等ゝ分ち自（ジ）の詞を二種とし、他の詞を

二種とゝもゝの自（ジ）の詞の一種いみゆる（下二段）きこゆる（下二段）などなり、

こゝろのそなるこゝもの、我が目にみゆる、我が耳にきこゆるな

ど、みる（四段）きく（四段）などゝいへべ我がみる我がきくふてともふ

自の詞なりこゝをもけくみづゝ、おのづゝのゝとい

ふ

自（オノヅカラ）　みゆる　きこゆる

自（ミヅカラ）　み　る　き　く

これ図面第一等の　おのづから然る詞　みづから然る詞　なり

○その一種はみまる（下二段）きあまる（下二段）なり　我が書畫などとり

いで、他ゝみまる、又我が琴ひきて他ゝきゝまるなどをいふ

自（ミヅカラ）　人ふ　みまる

人み　きゝまる

こゝ図面第二等の　ちかまる詞　なり

○他の詞の一種はみさまる（下二段）きゝまる（下二段）等なり　他ゝ狂言と

みさまる、淨瑠理をきかまる、又みせさまる（下二段）きゝせさ

まる（下二段）ともいふ他ゝ　狂言をみせさまる他に淨瑠璃をきか

せさまるなり、かく二様（フタサマ）ありといへども其意は一つ（ヒト）なり

他　ふ　みさまる

み　きゝまる

他　ふ　みせさまる

み　きゝせさまる

こゝ図面第三等の　他ゝ然せさまる詞　なり

○その一種はみらる（下二段）きあまる（下二段）こゝは我がおのづから

書畫のみらる、琴のきあまる、なり、又別はみらる（下二段）

きあまる（下二段）といふ詞ありこゝは我が書畫を他ゝみらる、我

が琴の弾を他ゝきあまる、なり、これはいづれも他ゝ然せら

る、詞なり今こゝけてあづからといひ他といふ

自　ふ　みらる　きらる
他　ふ　みらる　きらる

こゝ図面第四等の

わのづから然せらる詞
他ふ然せらる詞

なり

以上自他の四等なり委しくいえむに六等なるべしわのづ
ら然るとこゝつからら然せらるとと一等ふことわのづから然せら
るゝと他ふまあせらるゝとと四等ふことく示す図を見て了知

一等　わのづから然せらる詞　こゝを然る詞とふ
二等　物と然せる　こゝを然せる詞とふ
三等　他ふ然せさする　こゝを然せさする詞とふ
四等　わのづから然せらる　他ふ然せらる　こゝを然せらる詞とふ

八種活用混收	一等	二等	三等	四等
遊四段 あそぶ	然	然	然	然
立四段 たつ	る	る	せる	らる
習四段 ならふ	詞	詞	詞	詞
解下二段 とくる				
落中二段 おつる				
亂下二段 みだる				
隔四段 へだつ				
見下二段 みる 一段 る				
聞下二段 きこゆ 四段 き く				
思下二段 おもふ 四段 おもふ				
同上		あそぶる	あそばする	あそぶる
四段 たつる		たつる	たてさする	たゝる
四段 ならふる		ならふる	ならえする	ならふる
四段 とくる		とかる	とかする	とかる
四段 おとる		おとる	おとさする	おとる
四段 みだる		みだる	みださする	みだる
下二段 へだつる		へだてる	へだてさする	へだてらる
下二段 みる		みる	みさする	みらる
下二段 きかる		きかる	きかせさする	きかる
下二段 おもはる		おもはる	おもはせさする	おもはる

まづて然せさせる詞ハ佐行下二段然せらるゝ詞ハ良行下二段ニ限まること上の圖まて明らかなれど猶初學の為ニ作用の諸活言より二かゝまるゝ定格を圖ニ著して示す事左の如し

第一段四

咲	押	立	逢	任	降
か	さ	た	ま	ま	ら
する	する	する	する	する	する
ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ

第二段一

著	似	干	見	射	居
き	ふ	ひ	み	ゆ	ゐ
きする	きする	きする	きする	きする	きする
らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ

第下二段

得	受	痩	捨	寢	添
え	け	せ	て	ね	へ
きする	きする	きする	きする	きする	きする
らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ

第中二段

起	落	戀	恨
き	ち	ひ	み
きする	きする	きする	きする
らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ

四段

學	消	枯	植
め	ゑ	れ	る
きする	きする	きする	きする
らるゝ	らるゝ	らるゝ	らるゝ

第五加行變格

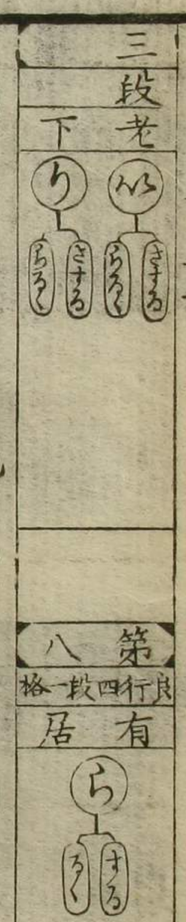
來
こ
きする
らるゝ

第六佐行變格

爲
せ
きする
らるゝ

第七奈行變格

往	死
な	
する	
るゝ	



図中（する）（さする）とあるハ他ふりかせさせる詞（ふる）（らる）とあるハ他ふりかせらるゝ詞なり熟覽して其用法を曉るべし

詞の活用ハ上巻ふ示しなまべこゝふハ辭の運用を示さむとも辭ハ詞の下ふつきて詞の意をたすけなすものなり作用言ハ五階なまべ受る辭五階あり、形狀言ハ六階あまべ受る辭六階ありその所属をバ上巻の図ふ著しなまべども八種活用ハ畧図してあまべこゝに全図を出せ、また図面ふ（く）（きる）（きる）とおなじことの重まるハあれど詞ハ輕重ありて其意味かゝわることをも辭の所属ふよりて右らゝむとてなり

○終止言のさくハ輕くしてサキマスとゝふ意、連體言

のさくい重くしてサクワイとゝふ意終止言のきるハ輕くしてキマスとゝふ意連體言のきるハ重くしてキルワイとゝふ意あてなゞ詞もかくのごとく意異なり又き ち ちなどある上のき ちハ將然言下のき ちハ連用言あゝく辭の受ざま異なるとゞ心をとゞめて考べきなり活語指掌の俗解のところをもらゝつてらゝあらせてこゝろべし

作用言

一階	將然言
二階	連用言
三階	終止言
四階	連體言
五階	已然言

第四											
咲	か	む	ず	け	く	く	か	け	く	く	か
押	さ	む	し	せ	す	す	す	せ	す	す	す
立	た	ま	ち	て	つ	つ	に	て	つ	つ	に
逢	む	ま	ひ	へ	ふ	ふ	ふ	へ	ふ	ふ	ふ
一段 住	ま	む	み	め	む	む	む	め	む	む	む
降	ら	む	り	れ	る	る	る	れ	る	る	る
第一 着	き	ず	き	れ	く	く	か	れ	く	く	か
似	ゐ	む	ゐ	れ	ぐ	ぐ	ぐ	れ	ぐ	ぐ	ぐ
干	ひ	む	ひ	れ	ぐ	ぐ	ぐ	れ	ぐ	ぐ	ぐ
見	み	ま	み	れ	ぐ	ぐ	ぐ	れ	ぐ	ぐ	ぐ
二段 射	ゆ	む	ゆ	れ	ぐ	ぐ	ぐ	れ	ぐ	ぐ	ぐ
居	ゐ	む	ゐ	れ	ぐ	ぐ	か	れ	ぐ	ぐ	か

第三											
中段											
起き	落ち	戀ひ	恨み	老い	下り	得え	受け	痩せ	捨て	寢ね	添へ
ぞ	む	ま	ず	ち	を	ぞ	む	ず	ま	ず	ま
て	つ	け	り	ち	ー	て	つ	け	り	て	け
ら	む	で	り	と	か	ら	む	で	り	ぬ	ふ
る	つ	ふ	む	ゆ	る	う	く	す	つ	ぬ	ふ
に	か	な	る	ま	を	に	か	な	る	ぬ	ふ
れ	で	ど	れ	ど	れ	で	れ	ど	れ	ぬ	れ

第四				第五		第六	
段				加行變格		佐行變格	
響き	消え	枯れ	植ゑ	來		爲(ス)ず	
め	ぬ	れ	ゑ	こ		せ	
ず	ま	ず	ま	ず	ま	ず	ま
め	ぬ	れ	ゑ	き		し	
て	つ	ー	ま	て	つ	て	つ
む	る	ゆ	む	く		す	
り	と	か	り	ら	で	り	と
る	ゆる	むる	ふる	くる		する	
に	か	を	り	に	か	に	か
れ	ゆれ	むれ	ふれ	くれ		すれ	
ど	で	ど	で	ど	で	ど	で

第七	第八
奈行變格	良行四段一格
往死	有居
な	ら
む ぜ き む なむ む	ぜ む き なむ む
ふ	り
て けり なむ	て けり と なむ ゆ
ぬ	る
らむ べし めり まじ なり とか	らむ べし めり まじ なり
ぬる	る
かな に なり を	かな に なり を
終	已
む ぞ ぞも	を ど ども

○形狀言ハ上巻ヨ全圖を出し（たるもぞ あしみハむぶく）

辭ふハ運用辭（ラクテラハ）ありはくらかざる辭（テヲハ）ありけくらくとらふハ（ぜハぜぬ祢と運用）

（きむハむめと運形くをらふ）次下ヨあらそを圖を見てあるべし、まくさ

くとらふ詞（ドウ）のてこまさより以下五階の辭（テヲハ）どもにいひつゞけくその用（ヨウ）ひぶりを示し（また俗言を添て其意をも曉（サト）べし）

作用言第一階辭

（多カ仮字（カナ）りて多くたるハ俗意を示せるなり以下ここなおなじ）

ぜ	ナイ	ぬ	ナイワイ
む	ウ	ね	ナイガマア
まし	マシヤウ	め	ウガマア
なむ	ウナラヨイ	ましり	マシヤウガマア
ぞ	ウナラ		

花ハ咲ぜといふハサカナイとふ意、花ぞ咲ぬといふハサ

カナイワイといふ意「花こそさか紅とつふハサカナイガマアといふ意なり「花さかむとつふハサカウとつふ意「花こそさかめとつふハサカウガマアとつふ意なり「花ハさかまゝ」といふハサキマシヤウとつふ意「花こそさかまゝ」といふハサキマシヤウガマアとつふ意なり「花よさかなむとつふハサカウナラヨイとつふ意なり「花さかむとつふハサカウナラとつふ意なり

作用言第二階辭

て

つ

タ テシマウタ	タワイ テキタワイ	タガマア テキタガマア
タギヤ テキタジヤ	タワイ テキタワイ	タガマア テキタガマア

ウ テイナウ	ウガマア テイナガマア	
テアツタ	テアツタワイ	テアツタガマア

け り

ぬ

き

し

「花さきてとつふハ雅言俗言差別なゝ「花ハさきつとつふハサイタ又サイテシマウタとつふ意「花ぞさきつるとつふハサイタワイ又サイテシマウタワイとつふ意「花こそさきけるとつふハサイタガマア又サイテシマウタガマアとつふ意なり「花いさきぬとつふハサイタヂヤ又サイテキタヂヤとつふ意「花ぞさきけるとつふハサイタワイ又サイテキ

タワイの意「花こそさきけ」ともいふサイタガマアヌサイテキタガマアともいふ意なり「花いさかれなむ」ともいふサカウヌサイテイナウともいふ意「花こそさかれなあ」ともいふサカウガマアヌサイテイナウガマアともいふ意なり「花いさかれきて」ともいふ前ノ年前ノ日サイテアツタともいふ意「花でさききて」ともいふ前ノ年前ノ日サイテアツタワイともいふ意「花こそさききて」かともいふ前ノ年前ノ日サイテアツタガマアともいふ意なり図面ふゐきを擧ぎて其を擧たり其の心を見るべし

作用言第三階辭

ら む	デアラウ	ら め	デアラウガマア
べ き	ベキデアラウ	べ け れ	ベキデアラウガマア
め り	トミエマス	め れ	トミエマスガマア
ま じ	マイ	ま じ け れ	マイガマア
ち り	ヂヤ	ち る	ワイ
ち り	ヂヤガマア		
と			
か	サ		

「花いさかれなむ」ともいふサクデアラウともいふ意「花こそさきけ」らめともいふサクデアラウガマアともいふ意なり「花いさかれきて」ともいふサクデアラウガマアともいふ意なり「花でさききて」ともいふ辭ふて雅俗差別なし、また

つのひざまゐりてサイタガヨイとゐふ意のべ〜あり花ぞさくべきとゐふハサクベキ「デアラウ」とゐふ意「花ぞさくべけむとゐふハサクベキ「デアラウガマアとゐふ意なり

「花ハさくめりとゐふハサクトミエマスとゐふ意「花ぞさくめるとゐふハサクトミエルワイとゐふ意「花ぞさくめるとゐふハサクトミエマスガマアとゐふ意なり「花のさくまゝとゐふハサクマイとゐふ意「花ぞさくまゝきとゐふハサクマイワイとゐふ意「花ぞさくまゝけむとゐふハサクマイガマアとゐふ意なり「花ハさくなりとゐふハサクギヤとゐふ意「花ぞさくなるとゐふハサクワイとゐふ意「花ぞさくなるとゐふハサクギヤガマアとゐふ意なり「花さくとゐふハ終止ちゝる詞をゐひおゝて下へつゞく辭なりこれハ雅俗差別なし「花のさくかとゐふハサクサとゐふ意ゝてサハ詞の下ふそへていふ詠嘆の辭なり

作用言第四階辭

かな	ギヤナア	
ゐ		
なり	ギヤ デアルギヤ	なる ワイ デアルワイ
なれ	ギヤガマア デアルギヤガマア	

（を）

「花のさくゝなとゝいふハサクヂヤナアとゝいふ意なり」「花のさくふとゝいふハ雅俗差別なゝ」「花ハさくなりとゝいふハサクヂヤ又サクデアルヂヤとゝいふ意」「花ぞさくなりとゝいふハサクワイ又サクデアルワイとゝいふ意」「花こそさくなれとゝいふハサクヂヤガマア又サクデアルヂヤガマアとゝいふ意なり、このなりハならむとゝ運用（バタラキ）ども三階のなりハならむとゝ運用（バタラキ）なゝ三階のなりと階のなりと異あるのみなり」「花のさくをとゝいふハ雅俗差別なゝ」

作用言第五階辭

（ゾ）ソコデ

（ど）ナレド

（ども）ナレドモ

花さけどゝいふハサイタガマア、ソコデとゝいふ意なり、ソコデと解もるが第五階のゝの俗意なり「花さけどゝいふハサイタガマア、ナレドとゝいふ意」「花ハさけどもとゝいふハサイタガマア、ナレドモとゝいふ意なり」以上作用言五階の辭（テニヲハ）の俗解なり、図面とてらしあはせて心うべゝ

形状言の辭も作用言の辭とかたることなるをもて別
に解を出さずして知るべし

希求言使令言之辨

物をもとめあせよとおもふる詞に二種ありその一種を希
求といふその一種を使令といふかく二種ふるまのわて
あるもそのの詞いひとつなりたで用ひざるふりて
意のかたりてあるひは希求あるひは使令となるなり
下に出せる図または俗解を見てさとるべし但し
形状言ふは希求使令ある事なるをもて作用言の図

のみを出せり

希求言使令言指掌図

五階

第四段				
咲	押	立	逢	住
さ㋕ヨ	お㋖ヨ	た㋓ヨ	あ㋑ヨ	す㋝ヨ
降				
ふれヨ				

四段奈行變格　良行四段一格等
は五階の詞やがて希求使令と
なる「花よさけ」「ちらであれ」の
類なるとちがうを中昔よりよ
といふ辭をそへてさけよあれよ
といふことなるいで來たるなるべし

第七 奈行變格	第八 羅格	第	第二段	第一段
往死	有居	一階	射居	似干見著
いねヨ ねヨ	あれヨ をれヨ		ぬよ ぬよ	ふよ ひよ みよ きよ

くよをそへぎてつかなり、さるゆゑみ片假字にてあるを

一段中二段等ハ一階の詞にかならぬよりつかの辭をそへて希求使令となるこの定格なり、そハ「衣をきよ」「親みよ」「早くおきよ」「人をうらみよ」の類なり

第三段	第二段	第中	第下	第
下老	恨戀	落	受	得
おりよ おいよ	うらみよ こひよ	おちよ	うけよ	えよ

第	第	第
下	下	下
捨	痩	受
すてよ	やせよ	うけよ

下二段加行變格佐行變格等ハあるまでもなく「え」「け」「こ」「おき」「せ」とよをそへぎてて希求使令にへるまでもなくあるまでつかはれる

第六	第五	四					
佐行變格	加行變格	段				二	
爲	來	植	枯	消	譽	添	寢
せ	こ	う	か	き	ほ	そ	ね
せよ	よ	よ	れよ	世よ	めよ	へよ	よ

よう(け)よ、こよ、ねそ(せ)よ、とい
の辭をそへていふなり

以上希求言使令言の圖なり例のさくとのふ詞にて此二つを曉さむふさ(け)とのふよりサイテタモレとのふ意なるあり、是を希求言とのふまたサイタガヨイとのふ意なるあり、是を使令言とのふさ(け)よとよをそへていふなり

こゝなすべき意なりこれ此例なるべしてさとるべし

圖面に擧たる辭の運用は希求言使令言のあらはしかたの如しよく味ひくさとるべし、たゞし受る辭は此わろふなかあるべしそのゝぶりとあゞなるべ初學の輩はかつりくまどふべきなり

語彙別記下卷

編輯權助水村正辭　總裁
權少外史横山由清
岡本保孝
神祇大錄
小中村清矩
榊原芳野　同撰
黑河真賴
閒宮永好
塙忠韶

寅八25合ロ/ロ

明治十六年九月三十日　翻刻御届
同　年十月　出版

翻刻出版人　大阪府平民　梅原龜七　東區備後町四丁目十一番地

全發賣書肆　全　大村安兵衛　東區淡路町二丁目十八番地